アントン・フガーの企業と時代（25）
——1553年の決算——

松 田 練

1

1553年秋に国王フェルディナントが上及び前部オーストリアの領主としてハイデルベルク同盟に加わったことは、ドイツのハーブスブルク家がドイツ諸侯と提携して皇帝の政治に対抗する道を進む傾向を思わせた。この頃フランス国王アンリ2世はリヨンの金融市場に大きな借款要請を発し、1553年10月のリヨンからの報告では、アンリ2世が前の大市で借入れた50万フランに加えて更に40万フランの借款を受けたと報じられた。エーレンベルクはこの報告についてこう述べる。「この全く明白な報告から分かかることは、国王が1553年の10月大市でリヨンの商人に約150万クローネを借りたこと、彼は大抵の借款に対し4％の利子を大市毎に支払わなくてはならなかったこと、そして当時彼と皇帝の間に休戦が結ばれていたにも拘らず、彼は借金の方法で武装を進めたことだ。」

この頃フランスでも商品取引が衰退して貨幣及び為替取引が盛んになることについて苦情が出された。フランス商人の苦情は特に、為替支払のために引

1）R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, II, S. 100.
揚げられた貨幣に関し、リヨンの外国銀行家の協定に向けられた。「外国銀行家は唯一利己的な関心のためにフランスにやって来て、現金を全部浚って国外に持ち出す」と非難された。だがこの非難はフガー社には当てはまらなかった。フガー社は1553年10月5日以来ネーデルラント摂政マリーアの借款要求に強く引き入れられた。マリーア王妃は先ずラーテプス・トゥヒェルに彼女の未払債務を12％の利子で延期することを承知させ、続いてトゥヒェルと彼女の財務官吏に同じ協定をフガー、ヴェルザーその他の商人に拡げるよう命じた。ネーデルラント政府は軍隊の給与に10万ドゥカーテンを必要としたからである。

神聖ローマ帝国の金融政治的出来事の重点が上ドイツからネーデルラントへ移ったこの決定的な時点において、フガー社のアントウェルペン支店長がマテウス・エルテルであったことは、アントン・フガーにとって大きな危険の種であった。何故ならエルテルは既述の如く、数年前ナポリ支店において疑わしい行動の前歴を有したからだ。確かにアントウェルペン支店にはアントンの長男マルクスがいて、社主である父と密接な連絡を取っていた。だがマルクスはこの年には未だ24歳で修業中であり、支店長エルテルの仕事に修正したり、反対したりする力は無かった。エルテルは当時アントンの甥のゲオルクと親しかったようで、ゲオルクはハンス・ヤーコブの弟として社内で彼を支援し、1553年10月17日にはフランスの貨幣需要の原因に関する政治的金融的情報を彼に伝えると共に、「イングランドとの結婚」の模様をエルテルに尋ねた。

社主アントンにとってこの頃当面の問題は、会社が20万ドゥカーテン関与したスペインからの銀輸送の問題であり、アントンはこれについて1553年

2）R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, II, S. 100.
3）拙稿、「アントン・フガーの企業と時代（23）」経済と経営、第18巻、第4号、1988年、125頁。
10月17日に指令をアウスブルクから手紙でアントウェルペン支店に伝えた。この送金に関して発生した事故の内容は必ずしも明確でないが、大要次第の如きものであった。フガー社のスペイン支配人クリストフ・ライザーは銀貨を納めた98箱をネーデルラントに発送した。輸送船がゼーラントのフリッスィンゲンVlissingenから1哩の所で座礁し、積荷と共に沈んだ。幸い積荷は漁師や潜水夫を使って回収されたが、その中少なくとも1箱は開かれて、中々一部紛失していた。後に窃盗の罪で水夫が捕われ、フガー社は盗まれた金の隠し場所を探しき出そうとしたが、その結果についての詳しい記録は残っていない。とにかくゲオルク・フガーは「この年の通常取引全体から金を」3,600グルデン拾てるのを嘆いた。彼は潜水夫がヴェーネーツィアにおけるように有能なら「もっと望みがある」と考えた。

1553年10月28日にブリュッセルの宮廷で目下の財政状態についてのような説明が行なわれた。ネーデルラント政府はスペインから運ばれた金の中、なお42万リーヴルを有する。加うるにブラバント当局が調達する答の13万リーヴルとドゥッテリによるフガー社と最近締結された契約から20万リーヴルが予定される。この合計75万リーヴルの収入に対する支出予定は次の如くである。20万リーヴルは収税長官証書の償還、30万リーヴルはフガー社に対する返済、5万リーヴルがガスパル・シェッツに、同じく5万リーヴルがヴェルザー社に返済するべきである。更にラーツアルス・トゥヒェルに対する3万リーヴルを初めとして他の商人に支払うべき金が9万リーヴルある。従って結局6万リーヴルしか使える金は残らない。この財政難を打開するには、等族からの30万リーヴルの援助とガスパル・シェッツからの10万リーヴルの貸付が期待されるだけである、と。

これより10日前の10月18日に、フガー家の支配下に在るヴァイセンホルン市の中等の検査所の廃止を求めるウルム市の要請によって成立した

国王の委員会は、ギュンツブルク Günzburg でこの問題について会談を行なう旨アントン・フガーに通告して来た。アントンはカルル・ポイティンガーにフガー家を代表して交渉することを委ね、「うまい言葉や態度にだまされてはならない」と忠告して、ウルムの動きに対抗するようにポイティンガーに指示した。6) こういう強硬なアントンの態度によってギュンツブルクの会談による委員会の和解の試みは挫折した。

アントンはギュンツブルクの会談に自らが出ない理由を「身体が弱っている」からだとしたが、7) 1553 年の秋から初冬にかけての社主の業務活動が著しく活発であったことを 11 月末頃の会社の通信文書は示している。ニュルンベルクのヴォルフ・クレーマー Wolf Kremer の一万グルデンの手形について、この商人を信用出来ぬと見たアントンは支払方法について指示を与えた。シュヴァーツ支店にはミュンヒエンに送付予定の円盤銅をニュルンベルク支店に送るように指示し、価格の下落が生ぜぬ限りティロールの銅のニュルンベルク向け販売を続行するように命じた。シュヴァーツ支店長ロナーにはシュヴァーツの彼の個人勘定の清算に関して問い合わせた。

2

1553 年 11 月 26 日スペイン王子フェリーベはパリヤドリーで、叔母のハンガリア王妃マリーアがフガー社の代表エルテル及びシェッツ兄弟と結んだ特権契約の変更を文書化し、その 60 万ドゥカーテンの貸付金は利子を含み 70 万ドゥカーテンの支払で返済されることになった。勿論その返済にはアメリカから到着する筍の貴金属が当てにされた。スペインの船団は 10 月末に 5 隻がアメリカ大陸から、4 隻が新アメリカ諸島 neuamerikanische Inseln から

出帆し、その積荷は243万ドゥカーテン以上と報告され、更にこれにアゾレスAzores諸島に在った旗艦の積荷を加えると、それ以上の収入が見込まれた。

しかし新大陸から届けられる貴金属の見込みだけでアントンは安心出来なかった。彼は11月28日にアントウェルペン支店長エルテル宛の手紙で「金をスペインから持って来るのは全く時間のかかる面倒なことだと話した。」

社主はエルテルにスペインの債務が限度に達したことをはっきり指摘したが、アントンは大陸からの貴金属輸送に余り大きな期待をもっていなかった。アントンの判断では皇帝の軍事資金は既に限界に来ているので、帝室財政の救済は対仏戦争の一時的中止に依存した。

ベルニッツは晩年のアントンの企業努力は「新たな経済的五角形、das neue ökonomische Fünfeck」の形成に向けられたと論ずる。それはアウクスブルーク——ネーデルラント——スペイン／ポルトガル——ナーポリ／フィレンツェ——ヴェネツィアを結ぶものである。従ってアントウェルペンからイベリア半島に向かう経済活動と並んで、ヴェネツィア経由下イタリアに向かう企業活動が見られた。こうして12月1日付けでヴェネツィア支配人ゼバスティアン・ツェッヒSebastian Zech宛の指令が出され、それはナーポリの業務の促進に関するものであった。

しかしこの新経済的五角形説は、ティロールの鉱山地域の如き会社の古くからの地域に対するアントンの経済的関心の後退を意味するものではない。確かにティロールの鉱山業における会社の活動は昔日の比ではなかったが、アントンは新坑道開発の意欲を失っていたかった。それならばこそ社主はシュヴァーツ支店の書記を「全く怠慢」だと叱って、支店長ロナーに警告を与え10）会社はティロールの御料局に対し引き続き債権を有したので、こ

の未収金の取立てのためロナーは12月初めに新たな銅買契約の草案を提出した。それは年引渡し数値1,400トシェントナー、価格はツェントナー当たり9
グルデンであったが、当局はこの価格は安過ぎると反対した。これに対しア
ントンは8.5グルデンを最高価格として指令したが、その理由はティロール
政府に対する債権8万グルデンは銅買契約からの償還では5％の利子で7年
もかかることになったからだ。会社としては銅契約から償還を受けるよりも
15,000グルデンの返済契約を結ぶ方がより早く元利を回収出来た。窮地に
陥った支配人ロナーがこの件から手を引こうとした時、彼は10グルデンの
ツェントナー価格を承認されたが、債務は3年以内に返済されるという条件
がついていた。社主は「このことはそれで充分だ」とした。11)

老社主アントンはスペインの支配人ハンス・ベヒラーに対しても強い口調
で訓戒を与えなくてはならなかった。12月5日にアントンはベヒラーの専断
を指摘して「お前は愚かな頭をお前のことだけに向けよ……私はお前が私の
命令と指図に従うことを欲する」と書いた。12)ベヒラーの業務遂行に対する
アントンの不満数多くあった。命令に反してリスボン経由の振替を行なっ
たこと、スペインの公債を引き見て28,000ドゥカーテンで売って630グルデ
ンの儲けしかなかったこと、アルマデン鉱山の火災に関する裁判で支配人
シーレンの指示に従わなかったこと等、社主の戒告は多岐に亘った。

だがアントンはこの支配人を罷免も配置転換も出来ず、彼を訓戒した後に
励まして使わなくてはならなかった。社主はベヒラーが情真に応じて行動し
て、スペインからの貨幣輸出のあらゆる可能な機会を捉えることを期待した。
アントンの最大関心事は会社がスペインに有している30万ドゥカーテンを
如何にして現金するかであったが、その具体的手続きは現地の支配人の判断
に委せるしかなかった。ジェーノヴァ経由、ポルトガル経由の道も考えられ

たが、スペインからネーデルラントへ向かう船団を利用するのが本筋であった。フェリーベ王子が来春ネーデルラントに赴くことは予想されたが、それ迄腕を振って待つことは許されない。何故なら「王子の出発が幾らか遅れることを私は心配する。」従ってアントンがペヒラーに与えた指示は、王子の船で送るのは残った最後の金であ、それ以前に多くの船に各々 4 万グルデン以下の金を積ませて送ることであった。但しその際保険をかけることなく、船の賢明な選択と慎重な輸送方法により高い保険料を節約すべきであり、何よりも大切なことは秘密の厳守である。主はこう記した、「それ故愛するペヒラーよ、失敗するな、また云い訳するな、上述のように仕事を果たせ。」

アントンはアントウェルペン支店長エルテルに対して、スペインからの現送のチャンスをペヒラーに知らせるように指令した。アントンはエルテルに対し、スペインの支配人たちに関して「これ以上強く激しく彼らに書くことは私にはもう出来るない」と打ち明け、エルテルも彼らに警告すべきであったと指摘した、「何故ならペヒラーは可成り怠け者である。」スペインからの送金がうまく行かなかった原因をアントンは支配人ペヒラーの怠慢に在りとし、支配人が安易に貨幣貸付を認めたことで会社に多くの損害を与えたとしめた。だが他にも植民地訴訟の件でも会社に大きな経済的損失の発生する恐れがあったが、これは「車が動かなければ油を注げ」という会社の常套の手段で、裁判官に対する金融的措置で片づけられた。

アントンは更にリスポン支店長トマス・ミュラーThomas Mullerに対しても叱責の手紙を送らなくてはならなかった。ミュラーはポルトガル王室と銅販売契約を結ぼうと考えていたので、社主はアウクスブルクの本店から 12 月 5 日付でこの契約を締結するなど指示した。何故なら今はマンリヒ社がハ

ンガリアの銅を握っているから、この取引を干渉する恐れがあり、アントウェルペン経由ポルトガル向けの銅輸送は高い費用の他に現在は輸送の危険も大きかったからである。しかしミラーは本店の指令通りにセビーリャ支配人のライザーに銅在庫を渡さず、勝手に銅を商人に売り、その商人はこれをセビーリャで販売したので、会社は損失を蒙った。そこでアントンはミラーに「何時も我を張ってはならない、そしてお前から銅を買い取ってセビーリャに送った者はお前よりも良く知っていたのだ」と諭した。ミラーは宝石取引や水銀取引についても社主から注意された。

3

エーレンベルクはアントン・フガーとアントウェルペン取引所の関係を述べた記述で次のように記している。「未曽有の貸借資金を必要とした皇帝の対仏戦争は、フガー家の手を引こうとする一切の良い意図をすっかり覆した。1553年には同家が皇帝と行なった幾つかの大きな貸借業務が既に再び認められる。マティアス・エルテルはブリュッセル宮廷に1口は195,000また1口は18,000ドゥカーテンを貸し、それらはフィラッハの借款と共にスペインを指定されたが、その際既に1557年迄の収入を請求しなくてはならなかった。更にアントン・フガーは4月にブラバントとフランデルンの収入に対する10%の定期金を30万カポルスグルデン購入した。最後に同じ年に更に3つの業務がお言及され、それらもまたネーデルラントで締結されたりしく、1口は85,000ドゥカーテン、1口は164,926ライン・グルデン、そして1口は1億7千3百万マラベディスである。その際アントン・フガーはアントウェルペン支配人のマティアス・エルテル宛の手紙で繰返しこう不平を述べた、「われわれの債権について宮廷から何の決定も来ない；成る程難かしい

アントン・フガーの企業と時代（25）

時勢なので彼らはそうは出来ないのだが、それは矢張り非常に腹立たしく、長引く事件だ。アントン・フガーは当時既にアウスブルクとニュルンベルクで、大きな新しい約束を履行するために金を借りなくてはならなかった。この年の末頃ニュルンベルクでこういう勘定の一つが期限となった時、彼は止むを得なければ更に10%で延期するように依頼した；「何故なら私が金を貸していたれば、それは年12%になる。」

エーレンベルクはアントンの苦情について更に述べる。彼はとりわけ金をスペインから取り寄せる困難を再三挙げた。成る程其処では万事順調であったろう；だが国家収入までも長期前に前倒しされている。エラッソがそれにも拘らず彼と取引する者は未だなお見出だしよすれば、それは極めて不利な条件でのみ生じ得た。「確かに皇帝陛下には、戦争を続けようとして金を借りることは大きな損害である；これら大君主たちに適当に戦意を失わせるべきである。」続いて直ぐ彼はこう不平を述べる；「この宫廷では全く思いやりが無く、確約した負債を支払わない；私の考えではそのためにアラスの司教に働きかけるべきである；エラッソに1,000 グルデンを贈るべきである。それは事を選ぶであろう。だが3回も4回もそのためにドゥカーテンにつき80 クロイツァーで更に借りることはすべきではない。」

エーレンベルクはまたアントウェルペン取引所に関する叙述で、次のように記している。グレシャムは1553年12月に出来る丈早く10万ポンドを最高12%で借りるように依頼されたが、彼は「全く恥知らずにも」15%を要求された。彼がやっと半年6%の貸手を見つけ、このことで王室の承認を取りつける間に皇帝の借款要求によって貨幣事情は再び逼迫した。「『アントウェルペンの取引所は』とグレシャムは続ける；『実際に変わっている；或る日には沢山金が在り、翌日には全然無い、何故なら此処には多くの金の貸手

18) R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, I, S. 155–156.
19) R. Ehrenberg, a. a. O., I, S. 156.
と借手がいるから、一人が取引したくないなら他の者が喜んでいる。」 エーレンベルクはこの「何故なら」、「weil は「にも拘らず」、「trotzdem」の誤りだと説明する 21）。グレシャムの話は続く。「フガー家とガスパル・シェッツは使える貨幣資本は全然なく、一般に人は何も受け取れない、何故なら皇帝は既に 30 万ポンド（＝180 万カロルスグレーデン）以上を借っているからだ。」 22）

グレシャムが説く通りネーデルラント貨幣市場の貨幣不足と利子高騰の元凶は皇帝の金融代理人の資金動員に在った。しかしアントウルヴァル市場の貨幣不足はスペインのレアール Real 銀貨によって救われた。フガー家のアントウルヴァル支店も、セビリア支配人クリストフ・ライザーが 1553 年 7 月から 10 月迄にスペインからネーデルラントへ送った 20 万ドゥカーテンについて 12 月 23 日にレアーレ銀貨で清算し、10 万ドゥカーテンは 1,102,941 銀レアーレと記帳された。

1553 年 12 月に目立ったことは、アントンがニュルンベルク経由でライプツィヒ及びベーメンに向かう取引関係について細心の注意を払ったことだ。社主が 12 月 6 日にアウスブルク本店からニュルンベルク支店長ディートリヒ・ホイフラーに宛てた手紙は、ホイフラーがニュルンベルク商人から取引立てた残金に関し、支店の帳簿に詳しいことを記してはならぬという以前の命令を繰り返した。それはマイヤがベーメンのシュラゲンヴァルト Schlaggenwald の錫取引について国王から独占特許を得ており、これにフガー社が秘密に関与していたからであった。「このことについて私の手紙に厳しく従うように」とアントンはホイフラーに指示した 23）

アントンはシュテルツィングの支配人ハンス・ザイラーに対し「ロナーはどのくらいから、彼を勧ましてはかどらせ、決算を急がせよ」と指示した 24）。シュ

ヴァーツ支店長ヴォルフ・ロナーに対してはアントンは配慮の足りぬことを
叱り、詳細な指示を与えた。ケルンセンの坑道賃足しの価格が高過ぎること、
製塩局長に酒器を贈るべきこと、未収金の本店送金、銅輸送組織の再編成、
銅鍛造業務の経営促進、銅の棚卸しについて、そして最後に新たな銅買契約
はロナーの云う 10.25 グルデンではなく、ヴィーン・ツェントナーにつき 8.5
グルデンに抑えるべきことなど、指示は多岐に亘った。
同じ 12 月にアントンはクラカウ支店の解散を命じたが、銅在庫は 400 グル
デン、家屋は実勢価格よりもずっと低い 500 グルデンにしかならず、未収金
の取立は「緩慢な金」であることが分かった。25) アントンは 12 月末にヴェ
ネーツィア支店長メインヒに対して、フゲラウからの今後の供給に合わせて
鉛の販売を促進せよと指示した。鉛は其処ではマイラー当たり 23 ドゥカーテ
ンで販売されたが、他に水銀と辰砂の有利な販売も期待された。棉花購入も
ギュンツブルク会談の関係で一時中止されていたが、この仕入の開始はこれ
迄の真鍮棒の売上で容易に清算出来た。
エーレンベルクはアントンのスペインからの送金の努力について、こう述べ
る。「スペインから金を取り寄せようとするアントン・フガーの継続的な努
力は、フィラッハ以来膨大にふくれ上った彼の個人契約に特に該当した。皇
帝の息子フェリーペ王子がスペインからネーデルラントへ持ち上げられた
時、アントン・フガーはその船で一緒に大量の銀を密かに送るべきことを指
令し、これは実際に行なわれたらしい。いずれにせよ 1553 年末に 20 万ドゥ
カーテンの銀がフガー家のためにアントウェルペンに届き、翌年には更に 30
万ドゥカーテンが取り寄せられることが、この許可をスペインで得ることは
非常に難しかったけれども期待された。フェリーペ王子がイングランド女
王メアリと結婚したことは、当時スペインで金を請求したすべての者にとって
有利に働いた。何故なら女王は金を必要とし、グレシャムがこれを受け取

リにアントウェルペンに派遣された。そこで彼が皇帝の許可を得て自分でスペインに金を取りに行くるなら、フガー家の支配人エルテルを含む若干のジェーノヴァ人が30万ドゥカーテンの貸付を行ったため、彼は非常に喜んだ。この出来事は実際に成立した。何故なら皇帝はメアリ女王に好意を示そうと思ったからだ。アントン・フガーはこれに112,750ドゥカーテン加わった。」

4

アントンは1553年12月31日締切で「総決算」、「Generalrechnung」を作成させた。それは1546年末の決算以降7年間の期間に亘るもので、その財産目録は自分で作成したものらしく、次のような数字を示した（単位グルデン）。

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>資産（「受取」）</th>
<th>負債（「支払」）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>アウクスブルク</td>
<td>157,717</td>
<td>200,079</td>
</tr>
<tr>
<td>ニュルンベルク</td>
<td>110,963</td>
<td>2,517</td>
</tr>
<tr>
<td>アントウェルペン</td>
<td>700,064</td>
<td>364,609</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴェネーツィア</td>
<td>38,402</td>
<td>7,673</td>
</tr>
<tr>
<td>ローマ</td>
<td>291</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ヴィーン</td>
<td>17,612</td>
<td>2,104</td>
</tr>
<tr>
<td>プレッサウ</td>
<td></td>
<td>930</td>
</tr>
<tr>
<td>クラクウ</td>
<td>41,070</td>
<td>638</td>
</tr>
<tr>
<td>トルン、ダンツィヒ</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>バルヒエンツ取引</td>
<td>63,443</td>
<td>552</td>
</tr>
<tr>
<td>ナーポリ</td>
<td>414</td>
<td>116</td>
</tr>
<tr>
<td>装飾品（&quot;Zoyas&quot;）</td>
<td>18,360</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

26）R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, I, S. 158.
アントン・フガーの企業と時代（25）

不動産 4,100
元帳 1,763,440 111,957
ハンガリア取引 2,430
スペイン 1,227,616 322,750
リスポン 310,715

計 4,456,637 1,107,843

この資産から負債を差し引くと3,348,794 グルデンとなり，アントンは用心のため10万グルデンを取りのけたので，残りは3,248,794 グルデンとなる。アントンは「債務（債権）、商品及び不動産」として前期より縦越しの所謂「基本財産」を2,327,276 グルデンとしたので，これを上記の3,248,794 グルデンから差し引いた921,518 グルデンがこの7年間の「真の利益」とされた。

アントンはこの総決算の際，利益の「分配」を予定したが，それは彼の生前には行なわれなかった。更に注目すべきことは，アントンの死後行なわれた1563年末の次の「総決算」は1547年1月1日から1563年末迄を計算領域に含んだから，この1553年末の「総決算」は会社にとっては中間決算的な意味を有した。いずれにせよこの7年間の利益92万グルデン余は年約5.5％の利潤率となり，前期の19％に比して著しい後退を示した。

アントンがこの決算で何よりも心がけたのは，会社の資産の安全性を確認することであった。そのため不良未収債権を明らかにし，信用出来る債務者を列挙した。資産の項目の主なものについて略述すると，アントウェルペン支店ではバールヒェント業務が筆頭に挙げられ，期末に存した48,725 反のパヒェントの在庫は133,993 グルデンと評価された。アントウェルペンの債権は541,313 グルデンで，その9割近くが収税長官証書であった。アントウェ

27）同稿，「アントン・フガーの企業と時代（18）」24頁。
ルベンの家屋は前期同様 15,000 グルデンと評価された。元帳の債務者にはアントン 926,555 グルデン、ハンス・ヤーコプ 101,502 グルデン、イェルク 100,786 グルデン、ウリヒ 134,476 グルデン、スライメント 97,999 グルデンが挙げられ、国王フェルディナントは 271,167 グルデン、プランデンブルク辺境伯ヨハンが 10,749 グルデンであった。スペイン勘定は宮廷及びマエストラスゴ債権及び個人貸付金等多岐に亘り、この中セビーリャのクリストフ・ライザーは 216,775 ドゥカーテン、皇帝 85,000 ドゥカーテン、バルヒェント債権 22,292 ドゥカーテン、水銀債権 15,539 グルデン等がある。マエストラスゴについては牧草地取引 156,752 ドゥカーテンが含まれている。リスボンでは収税長官ヨハン・ゴメスの債務が 137,000 ドゥカーテン、「鉱山局」、「Haus de mina」の役人たちの債務が 48,972 ドゥカーテン見られた。

ベルニッツは次のように述べる。皇帝の債務は「1553 年末にネーデルラン
ト収税長官証書に依るて既に 92,528 フレッシェ・ボンド（555,000 カロ
ルスグルデン）に上った。王室はこれに対し 12－14％の利子を払ったから、
約 10％の金利を支払ったフガー家にとってこの業務の収益は確実と思われ、
皇帝はアントウェルペンで信用を失ったというトマス・グレアシュの主張は
明白に退けられた。」

1553 年末の財産目録の資産と負債を 1546 年の財産目録の数字と対比させ
て表示すると次の如くである。

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1553 年</th>
<th>1546 年</th>
<th>1553 年</th>
<th>1546 年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ポーツェン</td>
<td>－</td>
<td>200</td>
<td>－</td>
<td>－</td>
</tr>
<tr>
<td>ハルル</td>
<td>－</td>
<td>168,815</td>
<td>－</td>
<td>2,241</td>
</tr>
<tr>
<td>シュヴァーツ</td>
<td>－</td>
<td>123,572</td>
<td>－</td>
<td>3,279</td>
</tr>
<tr>
<td>フゲラウ</td>
<td>－</td>
<td>10,634</td>
<td>－</td>
<td>100</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>数値1</th>
<th>数値2</th>
<th>数値3</th>
<th>数値4</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ヴィーン</td>
<td>17,612</td>
<td>60,780</td>
<td>2,104</td>
<td>74,699</td>
</tr>
<tr>
<td>ライプツィヒ</td>
<td>-</td>
<td>71,245</td>
<td>-</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>ブレスラウ</td>
<td>109,082</td>
<td>930</td>
<td>582</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>クラカウ</td>
<td>41,070</td>
<td>78,664</td>
<td>638</td>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>トルン</td>
<td>13,287</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ダンツィヒ</td>
<td>21,812</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ホーエンキルヒェン</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>9,941</td>
</tr>
<tr>
<td>ノイゾール</td>
<td>-</td>
<td>2,352</td>
<td>-</td>
<td>3,928</td>
</tr>
<tr>
<td>ハンガリア取引</td>
<td>2,430</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>アウクスブルク</td>
<td>157,717</td>
<td>622,162</td>
<td>200,079</td>
<td>94,084</td>
</tr>
<tr>
<td>ニュルンベルク</td>
<td>110,963</td>
<td>207,784</td>
<td>2,517</td>
<td>53,264</td>
</tr>
<tr>
<td>アントウェルペン</td>
<td>700,064</td>
<td>1,502,546</td>
<td>364,609</td>
<td>472,967</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴェーネツィア</td>
<td>38,402</td>
<td>154,117</td>
<td>7,673</td>
<td>4,679</td>
</tr>
<tr>
<td>ローザ</td>
<td>291</td>
<td>13,887</td>
<td>-</td>
<td>3,987</td>
</tr>
<tr>
<td>スペイン</td>
<td>1,227,616</td>
<td>2,220,027</td>
<td>322,750</td>
<td>493,271</td>
</tr>
<tr>
<td>リスボン</td>
<td>310,715</td>
<td>-</td>
<td>73,918</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>手形簿</td>
<td>-</td>
<td>90,412</td>
<td>-</td>
<td>694,026</td>
</tr>
<tr>
<td>宮廷簿</td>
<td>-</td>
<td>443,108</td>
<td>-</td>
<td>1,184</td>
</tr>
<tr>
<td>地代簿</td>
<td>-</td>
<td>53,746</td>
<td>-</td>
<td>2,065</td>
</tr>
<tr>
<td>元帳</td>
<td>1,763,440</td>
<td>92,809</td>
<td>111,957</td>
<td>60,082</td>
</tr>
<tr>
<td>ナポリ</td>
<td>414</td>
<td>251,468</td>
<td>116</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴァイセンツェルン</td>
<td>-</td>
<td>49,939</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>バルヒェント取引</td>
<td>2,430</td>
<td>-</td>
<td>552</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>エルフルト</td>
<td>-</td>
<td>26,602</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>フィレンツェ</td>
<td>-</td>
<td>31,114</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ジェーノヴァ</td>
<td>-</td>
<td>22,390</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>リヨン</td>
<td>-</td>
<td>24,458</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>不 動 産</td>
<td>4,100</td>
<td>729,331</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>装 飾 品</td>
<td>18,360</td>
<td>15,000</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>使 用 人</td>
<td>-</td>
<td>20,000</td>
<td>25,000</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>4,456,637</td>
<td>7,211,343</td>
<td>1,107,843</td>
<td>1,999,460</td>
</tr>
</tbody>
</table>

この表示はここ7年間におけるフガー社の業務の大変な変化を示す。ポーツェン、ハル、シュヴァーツ、フゲラウ4支店の勘定は1548年1月1日の「ティロール及びケルンテン取引」の分離を示す。ハンガリア取引の撤退によって東方支店の数が減少したのみでなく、他の支店の取引も衰退し、増大を示したのはパルヒエント取引とリュッペン勘定ののみである。アントウェルペン及びスペイン勘定は依然大きな数を示したが、元帳勘定の増大及び宮廷簿の消滅は決算操作の問題に係る。計算に際し重大な差異が生じたらしく、マテーユス・シュヴァルツの手に成るスペイン宮廷会計の2つの抜粋が出され、アントンはこれについて自分で詳細に検討した。スペイン宮廷に対する各社員の期末における債権は、アントン908,266グルデン、ハンス・ヤーコプ505,117グルデン、イェルク100,786グルデン、クリストフ133,212グルデン、ウルリヒ108,641グルデン、ライムント97,783グルデンで、これらの金額は上述元帳に記された勘定から宮廷簿に振替えられるべきものであった。

1554年初頭におけるアントンの最大の懸念はブランデンブルク辺境伯アルプレヒト・アルツィヒーヴァデスの行動に向けられた。フガー社は辺境伯に対し2千グルデンの未収債権を有したが、アントンが心配したのは金のことではなかった。辺境伯は前年12月に皇帝から帝国追放を宣告され、アウクス

29) 拙稿、「アントン・フガーの企業と時代（21）」125頁。
ブルク市もこれに倣った。辺境伯にはフランスの援助金10万クローネンが前部オーストリア経由で送られる筈だと噂され、国王フェルディナントの周辺ではこの送金を済ましようと計画をめぐらした。国王の息子マクスィミーリアーンをスペインからの渡航中に誘拐するというフランスの陰謀も伝えられた。辺境伯の行動は国際的関連を以て、上ドイツの戦火の危険を予想させたので、アントンはアントウェルペン支配人エルテルに対し、「われわれはこの春未だ多くの憂慮を心配しなくてはなるまい」と書いた。30)

1554年2月20日にティロル政府は国王の宮廷に対し、精錬所が徐々に操業を上げ始めたと報告したが、それは国王顧問ヴィルヘルム・ギーゲーからティロル鉱山業の最近の「後退状態」。"hindterstansnd"について相談を受けたアントン・フガーが「精錬所の必要と維持のためのすべての借金で忠順且つ好意的に振舞った」からである。31) しかしこの数月には若干の紛余曲折があった。ギーゲーはラテンベルクの銅貿売契約にフガー社を参加させるためにアウクスブルクにアントンを訪れたが、アントンは彼の未収債権を詳しく挙げて善処を要望した。ギーゲーからの報告を受けた国王フェルディナントは2月半ばに両シュレーザーヴェンの副長官Vizedomである国王顧問フリードリヒ・フォン・レーデルンFriedrich von Redernに次のように指令した。元利382,350グルデンのフガー社に対する債務をシュレーザーヴェンのビール税、ウンガリッシュ＝アルテンブルクとスロヴェニア地方の三十分の一税及びライバーハLaibachの付加税からの収入で支払うべし、と。更に数日後の国王はハル造幣局長ウルゼンターレルにこう指令した、この不快な借金を片づけるため、ティロールの56,000グルデン借金の残額6,405グルデンを千グルデンの月賦でアントン・フガーに渡すべし、と。

インタールにおけるフガー社の鉱山業務は当時未だ可成り大きかった。

ファルケンシュタインにおける同社の関係者は重上納金のみで65,036 グルデン、エルプシュトレーンでは 8,400 グルデン、32 そしてティロールに在る会社の不動産は16,000 グルデンと評価された。5 %の利子の60,499 グルデンの現金負債は未だ清算されず、ラテンベルク国営精錬所から毎月1,500 -2,000 グルデンが返済される筈であったが、その履行は先立つ鉱石債務のため見込まれなかった。しかしアントンは皇帝とより強く結びついていたとはいえ、国王ヴェルディナントに対しても提携の態度を維持したのである。

アントンの国王ヴェルディナントに対する業務提携の点で重要な役割を果たしたのは、曽てのフガー社の支配人でアントンの姻戚でもあったコンラート・マイヤであった。マイヤはベーレンで国王と鍛造契約を結んで銅取引を営んでいたが、マイヤとフガー家の協力関係は出来る限り秘匿された。ところが1554年2月半ばに国王ヴェルディナントは大口の銅購入に関しこう約束した。この2万グルデンの錫代金はゾルツブルクにおいてアウスビーAustseeの製塩局長ゼバスティアーン・トゥンクル Sebastian Tunckl から10%の優遇年利で1年半以内にフガー家に支払わせる、と。フガー社は銅取引を営んでいなかったから、軍需用銅製造のため国王が必要とした大量の錫を有していた筈はなく、マイヤからの錫の購入にフガー社が関与したに違いない。

カルル5世は1554年1月28日にブリュッセルで妹のネーデルラント摂政マリアに、対仏戦争を進展し彼の政策を実現するために百万ドゥカーテン以上を調達してほしいと伝えた。45 万ドゥカーテンはスペインからの手形振替で、60 万ドゥカーテンはネーデルラント政府がフガー家及びショッツ家から借款を受けるというのが、皇帝の財政顧問たちの計画であった。そのためには年14%という高い利子も認めようという腹案であったが、これ丈の大金

の調達は非常に困難な仕事であった。そこで皇帝は2月16日に王子フェリペに対し次のような文書を送った。フガー家を満足させるように、何故なら同家の今後の態度に皇帝にとって重要なことが依存している。40万ドゥカーテン手形の準備が実行出来ぬというのは不満である。「それ故如何なる場合にも約束通り履行するようお前に切に要請し且つ命ずる；何となればさもないと全く信用を失い、信用して交渉した商人も、彼らに依存している他の者をも」失望させることになろう。33)

アントン・フガーが心配した通りアルブレヒト・アルツィヒー・アデス辺境伯は、国王フェルディナントがハイデルベルク同盟に加わって以来情勢が不利になったにも拘らず、執拗に私鬱を続けることに努めた。国王の命を受けたヨハン・ウルリヒ・ツァーズィウス Johann Ulrich Zasius 博士は、リヨンで辺境伯のため融資に努めていた辺境伯の腹心ズィルヴェスター・ライトがベルンにやって来て、辺境伯は前部オーストリアをフランス国王から知行として受領したから、スイス人が辺境伯を援助するなら、この新知行地にツヴィングリ派の教会秩序を導入すると説いていることを、1554年2月に主人の国王フェルディナントに報告した。

ツァーズィウス博士は3月初めに国王に対し、アウクスブルクを訪れたシェルトリンについて辺境伯との連絡に関して報告した。辺境伯はザクセン選帝侯とのズィーフェルスハウゼンの会戦の敗北後、彼の残存軍隊の指揮官としてシェルトリンを招くためライトがこの提案を携えてシェルトリンを尋ねて来た。しかし前年12月に皇帝と合解したばかりのシェルトリンは、フリースラント遠征を指揮するなら月10万クローネを受取るという提案を拒否した。フランス国王の支払に対し不信を抱いていたこの傭兵隊長は帝国都市アウクスブルクに仕えることを決意し、市の有力者レーリンガーとバルトロメーユス・ヴェルザーに市はハイデルベルク同盟に加入すべきだと

勧告した。ツァーズィウス博士からこういう報告を受けたフェルディナント
はハイデルベルク同盟から多くの利点を期待した。

だがツァーズィウス博士は3月15日にバーデンから、国王の同盟加入に反
対があるという意外な報告を国王に寄せて来た。ツァーズィウス博士がヴェ
ルテンベルク公クリストフとの内密の会談から知ったことは、同盟成員の等
族は国王が彼の債権者、特にフガー、パウムガルトナー及びヘルヴァルトを
同盟の保護下に入れようとしているという危惧を抱いた。同盟に参加した諸
侯はこれに反対した、「何故なら上記の商人と一緒に不正な取引に彼らは係わ
り合いたくなかった」とツァーズィウス博士は拒否の理由を説明した。34) ド
イツの小諸侯が上ドイツの大商人をどう見ていただけを示す適例と云えよう。

6

1554年3月5日にゲオルク・フガーはシュヴァーベンのクルムパハ近郊の
村ダイゼンハウゼンDeisenhausenを13,500グルデンでオイヒャリウス・ウ
ンゲルターEucharius Ungelterから購入し、3月12日にはハンス・ヤーコプ
及び小ライムント兄弟はシュヴァーベンのヘーレンハウゼンHörenhausen
の土地を750グルデンでクラウス・パウアKlaus Paurから買い取った。企業
の状態や政局の変転に拘りなく、こうしてフガー一族の領地拡大の営みは続
行された。

だがエーレンベルクは次のような諌話を記している。アントン・フガーは
上ドイツで彼の個人勘定で大金を借りていて「その中1554年2月に3万グル
デンの勘定が期限であったが、驚いたことに返済に必要な金を調達するのに
苦労した。アントン・フガーはエーレンテルに是か非かでも金をアウクスブルクに
送付するよう再三指令した；『何故なら私にはそれに私の信用がかかってい

る」そして直ぐ続いて「私には確かに事柄自体に劣らず人びとの聴りが重要だ。それは没落の始めの憂うべき徴候であった。」

スペイン王子フェリーペとイングランド女王メアリとの婚約は1554年3月6日に成立した。フガー支配人エルテルから、アントウェルペンで待ち受けている10万ドゥカーテンの支払を王子が延期した旨を聞いた皇帝は、4月1日に再び息子宛に次のように書き送った。「すべての心配はお前が今送るべきものに在る。契約をした商人たちは処で大きな抗議をしている。何故ならそれは加わった者は非常に多数で、彼らは資産家ではない。そこで私はお前によく一席要請しなくてはならぬ、財務会議で。」

そこでフェリーペ王子は4月10日にパリヤドリーで次のように命令した。インド市役者の公認を受けた要求が伝えられたその後、一切の貴金属を1553年11月3日に送ってハンス・ヤーコブ・フガー又は彼に代わって両支配人ヨハン・フォン・シーレンとクリストフ・ライザに渡すべき、と。

1554年4月21日皇帝に対するフガー社の新たな貸付契約がブリュッセルで成立し、支配人エルテルは皇帝に25,000ドゥカーテンを良く通用する通貨で渡し、スペインからの後の船団で運ばれる全で返済を受けることになった。輸送の危険はすべて王室が引き受け、会社は損害の場合は元金25,000ドゥカーテンに12%の利子を付けて返済を受け、通常のスペインの手数料は免除され、保険、運賃その他の費用としてフガー社は6%を支払うという契約であった。

スペインのハープスブルク家にとって当面の最大の問題は間近に迫ったフェリーペ王子の航海であったのに対し、ドイツのハープスブルク家にとってはアルツィヒアデス辺境伯を押え込むことが目下最大の急務であった。

ズントガウ、プライスガウ及びエルザスは辺境伯とフランスの協定によって不労にすかされており、フェルディナントはアレマン人の地域 der alemanische Raum で活動しているライツを早く逮捕するよう命令したが、4月3日に国王は上オーストリア政府に、辺境伯のためのフランスの金が既にシャフハウゼン Schaffhausen に届いたと伝えた。辺境伯自身が金を受け取りに去処へ行く筈だから、辺境伯と2人の協力者ズィルヴェスター・ライトとハンス・バルナー Hans Parner を捕えよと政府は厳命された。国王と上オーストリアの顧問たちはこの金を没収して、ハイデルベルク同盟の費用を支弁しようと考えた。

シュレーディエンの副長官レーデルンは国王の指令にも拘らずフガー社に指定された金を渡さなかったので支配人ヤーコブ・ザウエルツァブフはこれに抗議し、結局5月16日に国王自身がウィーンから介入しなくてはならなかった。スロヴェニア地方の金についても同様で、ハンス・テテンペック Hans Tättenpeck が其処の三十分の一税徴収官になって以来1年半の間にフガー社は11,160 グルデンしか受け取らなかったが、約束は毎年3万グルデンであったので、フガー社はこの点も国王に訴えた。そこでウンガリッシュ＝アルテンブルクの三十分の一税徴収官コスモス・ギエンガー Kosmas Gien-ger は1551 年初めから1553 末迄の彼の在任期間中どれ丈の金をフガー社に渡したか調べて報告することになった。

このようにフガー社に対する契約の履行に不充分な点があったにも拘らず、国王フェルディナントは1554年5月に彼の委員ゲオルク・イルツィングとハンス・マッケルガーハンス Matschperger に対し、更にフガーの許で貨物と金属供給を懸願するように指示した。国王は4万グルデンの貸付乃至は少なくともその保証と英大砲製造のための8千ツェントナーの鉄を希望した。並行して上オーストリアの政府及び御料局のラテンペルクの銀契約に関するフガー及びハウク＝リンク家に対する説得が行なわれた。

国王の委員たちのアウスブルクにおける努力は6月10日のウィーンの
国王の証書となって実を結んだ。その中でフェルディナントはフガー社が彼の希望に応じて、現在の戦争支出のため彼に4万グルデンを貸したことを認めた。更に8千ツェントーナーのブライベルク Bleiberg のフガー社の鉱が提供され、これは16,000グルデンと評価された。総額56,000グルデンについてアウスゼー税関の管理者は証書を作成して会社に渡し、この金はザルツブルク経由で返済されることになった。

7

フランス国王アンリ2世の3つの部隊は1554年4月にアルトワ、フランデルン及びルクセンブルクの国境地帶で再び行動を開始した。皇帝カルル5世の政策目的は当面の敵を打破する事ではなく、イングランド女王と息子フェリーペの結婚を介してイギリスにニーハーブスブルク家の勢力を植え付け、フランスを包囲し、出来ればドイツのプロテスタント諸侯を奮らしめ、そして法王の活動も押し込めようということに在った。従ってメアリ女王の使節グレシャムの金の請求に対しては、スペイン王国の法規を超えた措置が構じられることになった。

エーレンベルクは述べる、「グレシャムが1554年にスペインに旅して具在でイギリス女王のために30万ドゥカーテンを受け取ろうとした時、彼が入手したアントウェルペン商人の手形の中には、こうして金をスペインから取り寄せようとしたオクタヴィアーノ・ロメリーノ Octaviano Lomellino の32,000ドゥカーテンやアントーニオ・スピノラとフレデリーノ・インペリアーレ Frederico Imperiale の17,000ドゥカーテンもあった。」37 即ちグレシャムはフガー家やシェッツ家の手形の他にジェーノヴァ商人の手形も利用してスペインから金を持ち去ったのである。これについてエーレンベルクは

37) R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, I. S. 345.
こう記している。「今やイギリス女王がスペインの王位後継者と婚約した時、両国の財政の一種の混合が生じ、その最初の結果は現金をスペインから奪うことがイギリス王室にも許されたことに通った。この仕事のためにグレシャムは既に1554年1月に、こういうやり方で彼女のスペインの負債を減らさせることを望んだジェーノヴァ人から提案を受けた。だが取引が締結されたのは、西英結婚が目前に迫った5月になってからであった。ジェーノヴァ人の他にフガー家も業務に関与したこと、及びグレシャム自身が金を取り寄せるためスペインに旅したことを、われわれは知っている。彼はその処で紙紙に尽し難い金詰まりを見出し、彼の措置は直ちにセビーリャの最古の銀行家の一つの支援停止を惹起した。『私は恐れる』と彼は書いた『彼らが皆破産することに私が罪を負うだろうと』。」

1554年5月17日グレシャムはアントウェルペンの公証人の前で次のように声明した。彼はアントン・フガーとその甥たち、ガスパル・シェッツとその兄弟、ヨハン・ド・マタンサJohann de Matansa、ヨハン・ロベス・ガットロJohann Lopez Gallo、アントン・スピノーラ及びオクタヴィアーノ・ロメリーノと契約を結び、この契約によりこれら諸国民から成る商人たちは女王がスペインから金を受取る手形を女王の代理人に振り出し、それについて彼らは代理人グレシャムから借用証書を受け取った。

皇帝は6月2日にブリュッセルからスペインの財務会議宛にこう書き送った。「イングランド女王陛下、わが娘、は非常に多くの労苦と支出を、彼女の布告の前後、また特に最近その王国から彼女を追い出そうとした時、わが息子、王子殿下との結婚に関連した時に有し、それは彼女が始集してなお維持している兵士のために彼女を大きな財政難に陥れた。この時点で彼女は、諸君が同封の報告から見る如く商人たちと交渉し、かくて彼女は彼女に375 マラベディスで32万ドゥカーテンをかの王国（スペイン）で支払い、それにつ

38) R. Ehrenberg, Das Zeitalter der Fugger, II, S. 63-64.
いて彼らは次の如く彼らの手形を与えた：昨年の10月大市の支払日で65,000。ビリャロン Villalonのそれで20万及び来る5月大市で55,000。これに対し彼女はアントウェルペンで1555年4月25日に75グロッシュンで32万ドゥカーテンを彼らに支払わなくてはならぬ。上記女王は朕に、彼女が他の王国から（金を）輸出する許可を諸君が与えるよう切実に願った。」

フランシスコ・エラッソが副署したカルル5世の書翰は、メアリ女王に対する皇帝の援助の堅い決意を次のように表明した。「朕と王子が彼女に対し有する義務に鑑み、且つ彼女がわれらに願いしきことの重大なるが故に、朕は——かの王国の大いなる貨幣不足とそれより生じ得べき不都合に当面し口実はあろうとも——彼女の願いを決して拒否せぬ積りである、そは現状勢において重大なる結果を有せん。然るが故に朕は彼女に承諾を伝えたり。」

皇帝の書翰に同封された文書にはメアリ女王が32万ドゥカーテンを手形で受け取った者の名を記したが、筆頭はアント・フガーの120,750ドゥカーテン、続いてガスパル・シェッツの5万ドゥカーテン、更になお7人の商人が次の金額で続いた。オクタヴィアーノ・ロメリーノ4万、フェルナンンド・ロペス・デル・カンポ3万、アントーニオ・スピノーラ20,250、ファン・ロペス・ガッロ19,000、ファン・ド・マタンサとジャンバッティスタ・デリ・アファイクティGianbattista degli Affaitadiがそれぞれ15,000、最後にベネディクト・カプリアーナBenedicto Caprianaが1万ドゥカーテンであった。

皇帝カルル5世は弟フェルディナント国王に未だ帝位を譲らなかったが、帝国統治から手を引いて弟に委ねることを決意した。皇帝は帝国議会を召集し、これに法王も招いたが、皇帝自身は出席せず、フェルディナントに大きな権限を与えて会議を主宰させることにした。ブランディが「意味深長」と呼んだ6月10日の弟宛の手紙の中で皇帝は次のように記した。「そして兄弟

の間のことであるし、感ぐることのないように願って、君に理由をはっきり言うと、唯宗教の件だけである。それについては私は抜き難い懸念を有し、それを私は君に詳しく口頭で、最近はフィラッハでわれわれが会った際に述べた。」

カルル5世は弟の国王フェルディナントが帝国議会において彼の良心を苦しめるような譲歩はしないであろうと信じたが、目前の帝国議会で扱われ得るすべての点について、腹心の帝国副書記長ゲオルク・ズィギスムント・ゼルトに命じ、「内容豊富な」意見書を作成させた。

旧教徒のメアリ女王と息子フェリーベの結婚を間近に控えた皇帝にとって、帝国の指揮を弟フェルディナントに委ねたとはいえ、彼の遠大な政策を実現するために病軀を率いて対仏戦争の前線に赴く積りであり、そのためにもドイツにおけるこれ迄の彼の政策の基本方針は堅持すべきであった。そして皇帝の政治を支える金融的支柱の大黒柱は依然としてアントン・フガーの会社であった。

——1988年9月——

41) K. Brandi, Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation und Gegenreform- 
ation, S. 296.